

人々の力を信じ、
信頼されるような
協力を

2006年4月に在外事務所が開設されたばかりのウガンダ。
広く種をまき、できるだけ多くの人々に届く支援を展開して
いきたいと考えている。



JICAウガンダ事務所長

洲崎 毅浩
Susaki Takehiro

ウ
ガンダでの人間の安全保障は、まず人々の力を信じることで、そして人々に信頼

されるような活動を積み重ね、できるだけ多くの人の幸せな顔を見られるよう努力することで実現できると考えます。

「国家や国民の安全保障」という観点での協力は、ウガンダ政府の能力強化のためには意義がありますが、実際、現場で苦しむ人々の生活改善にまですぐ結び付かない場合が多い。だから、政府ではなく、国内に抱えるスーダンやコンゴ民主共和国、ルワンダなどの難民も含めた人々の笑顔のために、国境や国籍にとらわれず、周辺国のことも考えながら、協力を進めていく必要があると思っています。

ウガンダには昨年4月に在外事務所が開設されました。協力の歴史が浅い今は、信頼の醸成に取り組みつつ、人間の安全保障の視点に立つてどんな協力ができるのか、広く種をまいて検討する時期だと考えています。そして、芽吹いたところを選択・集中して協力する。逆に伸びの悪いところを集中的に支援するやり方もあるでしょう。

その種まきを担っているのが青年海外協力隊です。彼らは農村部に入り込み、どの分野でどういったニーズがあり、どんな協力ができそうか、探りながら活動しています。政府と農民のニーズにはいまひとつずれがあるもので、各分野の専門性を持った隊員が、まずはしっかりと現場のニーズを把握することが大切です。

そして、隊員の職種が人々のニーズと合っているときは継続して隊員を派遣できるよう、不要または職種を変えたほうが望ましいという場合は、要請内容の変更を検討するよう、事務所

がウガンダ政府と調整して派遣計画を立てています。

またJICAは、ネリカ米を含むコメの振興を支援しています。ウガンダは周辺国に比べて水が豊富で水稲も可能な国であり、コメ振興は単に食料増産だけでなく、農民組織化や所得向上、難民支援など多角的な意義をも見いだすことができます。

しかし、実際に水稲農家の田植えを手伝った隊員が「すごく疲れた」「たまりませんね、腰を屈めて植えるのは」と話すのを聞きました。健康な隊員ですらきつい作業を、例えば適切に植えれば収量が3倍になるといっても、栄養不良など健康上問題のある現地の人たちは簡単に手を出さない。エイズも問題ですが、栄養不良はさらに深刻です。真剣に水稲を普及させるのであれば、そこで働く農民たちが重労働に耐えられる健康状態をきちんと確保した上で、技術を提供する必要があることも忘れてはなりません。つまり、開発と同時にそれに伴うリスクに注目し、そのリスクを軽減・排除することが人間の安全保障の視点だと思っています。

今、アフリカの現場でよく言われているのが、経済成長を通じた貧困削減。これまで社会セクターの支援に偏りすぎていたから、これからは経済インフラにシフトしていこうという話ですが、そうなると、リスク軽減に貢献する教育や保健分野などの協力が脆弱(ぜいじやく)になってしまいます。開発ばかり進めても、リスクがある限り人は動きにくい。経済インフラへシフトではなく、経済インフラも強化して、開発に貢献できる力を持つ人々の参加を促していきたいと考えています。